



TITLE:

インドネシアの歴史教科書における「ロームシャ」について

AUTHOR(S):

佐藤, 正範

CITATION:

佐藤, 正範. インドネシアの歴史教科書における「ロームシャ」について. 東南アジア研究 1995, 32(4): 495-522

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56532>

RIGHT:

インドネシアの歴史教科書における「ロームシャ」について

左 藤 正 範*

A Study on “Romusha” in History Textbooks in Indonesia

Masanori SATO *

This article deals with the “Romusha” described in history textbooks used in junior and senior high schools in Indonesia from 1984 to 1993 and analyses the meanings and images evoked by these descriptions.

The results of an analysis of the “Romusha” in 9 junior high school history textbooks and 5 senior high textbooks can be summarized as follows; “Romusha” is the most symbolic word used to represent the Japanese Military Occupation of Indonesia (1942-1945). In Japanese, *romusha* means ‘physical laborers’, but in 7 of 14 textbooks the word means ‘forced laborers’, in 4 it means ‘laborers’, in 3 ‘soldiers of labor’, in 2 ‘heroes of labor’ and ‘soldiers of economics’, and in 1 each ‘forced labors’, ‘corps of forced laborers’ and ‘forced coolies’. Thus the word can be said to have more specialized meanings in Indonesian textbooks than in the original Japanese.

In 12 of the 14 textbooks there are descriptions of mobilizing the “Romusha,” their actual working conditions in 9, the methods of dispatching workers to job sites and their final disposition in 10, and the number of workers in 8.

It is evident that the image of the “Romusha” in Indonesian history textbooks used in junior and senior high schools is basically that of “pathetic forced laborers” from many points of view.

I はじめに

日本は、1942年3月から1945年8月までの約3年半にわたってインドネシアを占領し、軍政を実施した。それは短期間であったにもかかわらず、インドネシアの各分野にさまざまな直接・間接的影響を及ぼした。それが言語や教育などの文化面にまで及んでいることはこれまでしばしば指摘されている。¹⁾

筆者はこれまで、インドネシアの辞書、百科事典、文学作品、雑誌などに見られる日本語起源のインドネシア語彙の調査を通じて、言語面における日本軍政の影響に関する研究を行って

* 京都産業大学外国語学部 ; Faculty of Foreign Languages, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kita-ku, Kyoto 603, Japan

1) 日本占領期における言語・教育面での政策や影響などの研究に関しては [左藤 1980a; 1980b; 1980c; 1983; 百瀬 1990; 1991; 倉沢 1990; 1992; 西村 1992] などがある。

きた。²⁾ その一環として、インドネシアの小学校から高校までの教科書(103種類)に出ている日本語起源のインドネシア語彙を調査して、特に語彙の面で日本占領期の影響を探ろうと試みたこともある。³⁾ しかし、それらの中では、インドネシア側の意図や日本語起源の各語彙などに関する具体的な記述内容にはほとんど触れていない。それらの重要性は十分に認識しつつも、語彙調査の方を優先してきたからである。

インドネシア側は日本占領期をいかにとらえ、それを学校教育を通じて児童・生徒にいかに関えようとしているか……。これを理解するためには、インドネシアの教科書における、日本占領期に関する全体的な記述内容を分析して、逐一検討することが必要不可欠である。しかしすべてを一度に行うことは、紙数などの制約があって不可能であるため、テーマを限定して検証していかざるをえない。

また、全体的理解に至る方法論もいくつかあるが、筆者は、インドネシアの教科書に出ている日本語起源の語彙に関する記述内容に焦点を当てて分析することにより、それぞれの語彙によって表現されるイメージをいかなるものにしようとしているのか、というインドネシア側の意図を探り、全体的理解のための一里塚としてゆく、という接近方法を取りたいと思う。

しかし日本語起源の語彙はかなり多く、一度に全ての語彙に関する記述内容を取り上げることも無理である。そこで本稿では、以下の理由から、多くの日本語起源の語彙のうち「ロームシャ」(romusha, 「労務者」)一語だけを取り上げる。

日本では、「労務者」という言葉⁴⁾は「(主として肉体的な)労務に従事する者。労働者」(『広辞苑』)を意味するにすぎないが、最新のインドネシア語の大辞典 *Kamus Besar Bahasa Indonesia* (Edisi Kedua) には“romusa”の見出しのところに、「日本占領時代に重労働をさせられた人々；強制労働者」という説明があり [Tim Penyusun Kamus 1991: 846], 日本語の「労務者」とは意味合いが違っていることがわかる。

一方、インドネシアの小学校から高校までの教科書103種類(副読本を含む)に出ている日

2) インドネシアの辞書、百科事典、文学作品、教科書、ノンフィクション、雑誌に見られる日本語起源の語彙を調査した結果をまとめたものとしては、[左藤 1989; 1990; 1991a; 1991b; 1993a; 1993b; 1994] などがある。

3) [左藤 1993a] では、インドネシアの小学校から高校までの教科書を調査して、小学校の教科書19種類(社会・歴史18種類、その他1種類)、中学校の教科書36種類(社会・歴史18種類、インドネシア語12種類、その他6種類)、高校の教科書48種類(歴史27種類、インドネシア語10種類、その他11種類)の合計103種類(副読本を含む)に出ている日本語起源の語彙319語(合計3,585回)をまとめ、それらの語彙にインドネシア語の意味を付けている。

4) 『日本国語大辞典』では「労働に従事する人。おもに肉体労働に従事する人。労働者」[日本大辞典刊行会 1976: 548]とあり、『広辞林』でも「労働に従事する人。とくに、下層労働者」[三省堂編修所 1983: 2084]とある。

本語起源の語彙319語のうち、出ている回数の多いものの上位5位は次の通りである。⁵⁾

1. romusha (労務者)	215回
2. Tenno (天皇)	191回
3. Shogun (将軍)	179回
4. Nippon (日本)	142回
5. Shodanco (小団長)	124回

これから、教科書の中で「ロームシャ」の使用される頻度の多さがわかる [左藤 1993a]。

また、元教育文化相で、自ら歴史の教科書（本稿の＜資料＞A 1とB 1）を編纂したヌグロホ・ノトスサントは、教科書に「ロームシャ」という言葉をそのまま使用する理由を次のように述べている。

戦時中日本語が使われ、現在でもそれで意味がわかるからです。それにこの言葉には特別なフィーリングがこもり、ほかに適切な訳語がないのです。英語でもインドネシア語でも、ずばりと表現できません。私は、実際100万人以上が労務者として果てたと思っています。そうしたことも別の言葉に訳したくない理由です。[NHK 取材班 1984: 205]

このように、「ロームシャ」という言葉⁶⁾は、インドネシアにおける日本占領期を象徴する⁷⁾極めて重要な意味合いを持った言葉、キーワードである。それにもかかわらず教科書に出てい

5) 日本語起源の語彙のうち、出ている教科書の種類の多いものを上位5位まであげると、

- | | |
|--------------------|------|
| 1. heiho (兵補) | 45種類 |
| 2. romusha (労務者) | 44種類 |
| 3. Seinendan (青年団) | 40種類 |
| 4. Keibodan (警防団) | 38種類 |
| 5. Nippon (日本) | 32種類 |

となり、「ロームシャ」は第2位となっている [左藤 1993a]。

6) 「ロームシャ」には2種類の意味があった。日本側は、広義では、技能者や義勇軍兵士まで含んでおり、その数は262万3,691名である。また狭義では、「常備労務者」135万6,271名と「臨時労務者」73万8,844名の合計209万5,115名を指し、これがインドネシアでは、いわゆる「ロームシャ」として悪名高いものとなった [後藤 1989a: 83, 96]。しかし現在まで「ロームシャ」の正確な数字はわからず、日本側推計では200～210万名、インドネシア側推計では410万名という数字があげられている [村井 1991: 458; Nishihara 1976: 62]。

こうした「ロームシャ」徴用の発生した事情・経緯・実態などに関しては [後藤 1984: 65-98; 1989a: 69-107; 倉沢 1992: 180-241] に詳しい研究成果がある。

7) シホンビンは、その著書の中で、日本指導下の「大東亜共栄」の一環として日本によって行われたすべての事柄の中で、「ロームシャ」の問題こそ最も苦い経験をもたらしたものであろう、と述べている [Sihombing 1962: 153]。また [Nugroho Notosusanto 1979: 67] でも、同様の見方をしてい

る「ロームシャ」の記述内容をテーマにして本格的に調査・分析した研究はまだあらわれていない。⁸⁾これが、本稿で取り上げる最大の理由であり、ここで分析するだけの価値と意義が十分にあるものと思われる。

本稿では、「ロームシャ」という言葉がインドネシアの中学校と高校の歴史の教科書の中ではいかなる意味合いをもっているか、そして具体的にはいかに記述されているか、言い換えれば「ロームシャ」という言葉にいかなるイメージが与えられているかを検証することをテーマとしている。⁹⁾

ただし、本稿で資料として取り上げる教科書は、後述する理由により、1984年度から1993年度の間に使用されたものに限定する。それ以前のものや、1994年度から採用された新カリキュラムに基づいて使用されている教科書の記述内容との比較は今後の課題としたい。

II <資料>について

1) 学習指導要領の内容について

インドネシアでは小学校から高校まで、1984年の学年度から新しいカリキュラムが実施された。その大部分は1975年のカリキュラムを踏襲するものであった。しかしこの改訂で最も大きな変化は、それまで中学校で「社会」の一部として教えられていた「歴史」（1～3年生までの前・後期に週1時間）とは別に、また、高校では、1984年度のカリキュラムから全生徒に必修となった「インドネシア史・世界史」（普通科の1年生は前・後期に週3時間、2～3年生は前・後期に週2時間ずつ、職業科では各学年の後期に2時間ずつ）とは別に、新たに「民族闘争史教育」（Pendidikan Sejarah Perjuangan Bangsa）が、時の教育文化相ヌグロホ・ノトス

ン・ノトス

倉沢愛子はその著書の中で、「もしインドネシア人が、日本軍政期で最も恐ろしい経験を一つあげろといわれたら、おそらく“ロームシャ”と答える人が多いであろう。（中略）インドネシア人にとってロームシャとは日本の軍政下で過酷な肉体労働のために強制的に動員された労働者を意味する」と指摘している〔倉沢 1992：180〕。

さらに後藤乾一も、労務者問題が引き起こした最大の影響はインドネシア社会の日本軍政イメージと日本観の形成に与えた「永続的な」インパクトであろうし、「ロームシャ」という言葉が、インドネシア語化した日本語として定着しているのは象徴的である、と述べている〔後藤 1989a：100〕。

- 8) 日本占領期に関するインドネシアの教科書の記述内容を取り上げたり、翻訳しているものとしては、〔唐沢 1961；山本 1965；世界の教科書を読む会 1971；インドネシア共和国教育文化省 1982；永井 1984；NHK 取材班 1984；鈴木静夫 1984；木村 1989；別技 1977；1990；1992；越田 1991；西村 1992〕などがある。

- 9) 本稿は、第23回日本インドネシア学会（1992年11月12日、於：三重県賢島）において「インドネシアの教科書における『ロームシャ』の意味について」というテーマで研究発表したものを中心にしてまとめたものである。ただし、小学校の教科書における「ロームシャ」については、別稿にまとめる予定であり、本稿では取り上げない。

サントの主導の下に、小学校から高校までの全ての教育段階で民族精神と愛国心を高揚させるために¹⁰⁾ 必修科目として加えられたことである。それは、中学校、高校とも各学年で週2時間ずつ履修することが義務づけられた [Johnson 1993: 15-16, 20-21; 黒柳 1986: 142-143]。

本稿で、この「民族闘争史教育」が取り入れられた1984年度から1993年度までの10年間に中学校と高校で使用された社会科（その中の「歴史」のみ）・歴史の教科書だけを取り上げて検討する理由はここにある。

以下では、中学校の社会科と民族闘争史教育、高校の民族闘争史教育に関する教育文化省発行の学習指導要領¹¹⁾ に「日本占領期」のことおよびその「教材」のことがどのように説明されているかを見ていくことにする。

1986年に教育文化省のカリキュラム・教育設備促進センターから発行された中学校の社会科の学習指導要領 *Kurikulum Sekolah Menengah Umum Tingkat Pertama (SMP) — Garis-Garis Besar Program Pengajaran (GBPP) — Bidang Studi: Ilmu Pengetahuan Sosial* はわずか29ページからなる小冊子である。

この学習指導要領によれば、日本占領期は3年生の前期に、「インドネシア、近代に入る」（合計8時間）の中の一部（他に「20世紀の転換期における社会・政治の変化」と「民族運動」が含まれる）として教えられることになっている。その中に「日本占領期」の要点¹²⁾ として「第二次世界大戦とインドネシアへの波及」「インドネシアは日本の戦争支援のために原材料と人材の供給源とさせられる」「日本占領政府の政策は民族闘争に活用された」の3点があげられている（p.27）。ただし、「ロームシャ」に関する具体的な記述はまったくない。

一方、第II章「学習指導要領実施に際して注意すべき諸事項」には「教材」に関して、この学習指導要領に記載されたものと一致すれば、「教師は地元で入手可能な他の本を使用することができる」（第7項）となっており、またやはり、この学習指導要領に記載されたものと一致した教材を教師は選択することができる（第9項）となっている（p.3）。

そして資料としては、本稿の〈資料〉A1と「他の適切な本」を使用するように記されている（p.27）。

-
- 10) 民族闘争史教育の主要目的は、民族精神と愛国心を高揚させたり、パンチャシラ（建国五原則）教育を高めることなど、3項目あり、また取り扱う範囲は日本占領期における闘争を含めて、オランダ植民地時代以降の闘争から「新体制」（現スハルト体制）までである [〈資料〉B5:12]。
- 11) 高校の「インドネシア史・世界史」の学習指導要領に関しては、未見のため、ここには取り上げていない。ちなみに、1975年の高校「社会科」の「歴史」のカリキュラム ([Balai Pustaka 1980a] を参照) に関しては、[永井 1984] が取り上げているが、同カリキュラムには日本占領期、および「ロームシャ」に関する具体的な記述はないことがわかる。
- 12) 〈資料〉A4には、「1984年のカリキュラム/1987年の学習指導要領」の一部が出ているが、日本占領期に関する説明は1986年のものとまったく同じである。

次に、中学校の民族闘争史教育の学習指導要領 *Garis-Garis Besar Program Pengajaran Pendidikan Sejarah Perjuangan Bangsa Untuk Sekolah Menengah Umum Tingkat Pertama (SMTP)* (全12ページ) を見てみよう。

これは、教育文化省から1985年に発行されている。日本占領期に関連する内容¹³⁾ として「日本占領に対するインドネシア国民の抵抗」がある。これは1年生の後期に2時間で教えられることになっている。この中にも、「ロームシャ」に関する記述はまったく出ていない。一方、教材としては<資料> A 1 が指定されており、その他に「日本の占領および圧政に関する絵・写真」となっている (p. 5)。

この学習指導要領の「注」には、教材用の資料として、ヌグロホ・ノトスサントの主導のもとに編纂された「30 Tahun Indonesia Merdeka および／または同書の内容と一致した他の本」となっている。さらに1945年8月17日の独立宣言以前の時期に関しては、「新体制」(現スハルト政権を指す) になってからインドネシア共和国政府が発行した全ての本およびそれらの本と内容の一致した本が使用できる、と記されている (p. 12)。

一方、高校の民族闘争史教育の学習指導要領 *Garis-Garis Besar Program Pengajaran Pendidikan Sejarah Perjuangan Bangsa Untuk Sekolah Menengah Umum Tingkat Atas (SMTA)* (全11ページ) も教育文化省から1985年に発行されている。

その中に、日本占領期に関連するものとして次の4項目があげられている (pp. 5 - 6)。

1. 日本占領期における国民の苦難 (ロームシャ [労務者], キンロフシ [勤労奉仕]): 4時間, 教材・資料としては [本稿の] <資料> B 1 と強制労働 (ロームシャ) に関する絵。
2. 三A運動, プートラ (民衆総力結集運動), チューオー・サンギ・イン (中央参議院): 2時間, 教材・資料としては [本稿の] <資料> B 1 および「四ツ葉のクローバー」¹⁴⁾ とチューオー・サンギ・インの会議に関する絵・写真。
3. 独立インドネシア国家を実現する闘争機関としての独立準備調査会と独立準備委員会: 4時間, 教材・資料としては [本稿の] <資料> B 1。
4. 独立宣言前夜 (レンガスデンクロック事件と独立宣言文作成過程): 4時間, 教材・資料としては [本稿の] <資料> B 1。

これらはいずれも、1年生の前期に教えられることになっているが、これらを通じて、生徒

13) <資料> A 9 には、「1986年の民族闘争史教育の学習指導要領」の一部が出ているが、日本占領期に関する説明は1985年のものとまったく同じである。

14) 「四ツ葉のクローバー」とは、「四身一体」(Empat Serangkai) のことで、日本占領期におけるインドネシア側の4人の指導者 (スカルノ、ハッタ、マンスール、デワントロ) による集団指導を示すスローガンである。

が、日本占領期における国民の苦難と民族指導者たちの闘争戦略の正しさを理解できるようになることが目指されている（p. 1）。

「ロームシャ」に関する具体的な記述としては、上記1の「強制労働（ロームシャ）に関する絵」とあるだけである（p. 5）。

この学習指導要領の「注」には、上述の中学校用民族闘争史教育の学習指導要領にあるものとまったく同じものが出ている（p. 11）。

以上が、日本占領期に関する中学校・高校の社会科・歴史の学習指導要領と「教材」についての主な内容である。いずれも大まかな「要領」があるだけであり、「ロームシャ」に関して、いかに教えるべきかといった具体的な指導要領はまったく示されていないことがわかる。

2) 歴史の教科書について

インドネシアで1984年度から1993年度に使用された中学校・高校の歴史（「社会科」の中の「歴史」を含む。以下同じ）の教科書には「国定」「検定」「選定」の3種類がある。

社会科・歴史の学習指導要領には「国定」の教科書として、中学校用は＜資料＞A 1，高校用は＜資料＞B 1のそれぞれ1種類ずつだけが定められている。

「検定」のものは、「国定」のものを補う一種の「補助教材」—(buku pelengkap) または「副教材」(buku penunjang) として、学習指導要領にのっとって編纂されたものを教育文化省が「検定」¹⁵⁾して、それに「合格」したものである。

「選定」のものも、学習指導要領にのっとって編纂されたもので、1980年に「生徒の積極的学習方法」(CBSA)¹⁶⁾が導入されて以来、「国定」の教科書を補う形で「積極的に」使用されている。¹⁷⁾

「ロームシャ」に関してインドネシア側が意図する意味や記述内容を理解するには本来＜資料＞A 1とB 1だけを分析するだけでよいのかもしれない。しかし、「検定」と「選定」のものも、「副教材」とはいえ、実際には「教科書」として幅広く使用されてきたこと、さらにそれらの内容がかなり異なっており、その相違点・類似点を比較検討する意味も大きいと思われる。

15) 「検定」といっても、A 2, A 3, B 2の場合、「国定」のものを「補足」する形で、すでに出版されていた「教科書」を「追認」する形をとっているため、実際には「政府認定」という方が実状には近いようだ。

16) CBSAとは「Cara Belajar Siswa Aktif」（生徒の積極的学習方法）のことで、児童・生徒の自主性を重んじ、個人やグループによる学習を積極的に進めるものである。イギリスで開発された、この方法は1980年から西部ジャワ州チアンジュールの60校の小学校で試験的に実施され、その後1980年代にはインドネシア全土で実践されるようになったという [Ateng Winarno 1991: 115]。

17) 教科書の選択は、地域によって違いがあり、州で決められるところもあるようだが、例えば西部ジャワでは、その選択は校長と教科担任に任せられており、最終的には教科担任が決定できるという (Ahmad Dahidi (バンドゥン教育大学講師) とのインタビュー。1994年2月21日、於：京都)。

ることから、本稿では「検定」「選定」のものも取り上げて検討することにした。

本章では、1984年から1993年の間に使用された、中学校と高校の歴史の教科書のうち、「ロームシャ」の記述（日本占領期を取り上げているものにはすべて出ている）があるものだけを取り上げ、それぞれの概要を紹介していく。

ここで取り上げる中学校の歴史の教科書としては、「国定」のものが1種類（＜資料＞A 1）、「検定」のものが2種類（A 2, A 3）、それに「選定」のものが6種類（A 4～A 9）である。また高校の歴史の教科書としては、「国定」のものが1種類（＜資料＞B 1）、「検定」のものが1種類（B 2）、それに「選定」のものが3種類（B 3～B 5）である。

a. 中学校の教科書

＜資料＞にあるA 1 [Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 1985] は、教育文化省による『中学校用インドネシア国史 III』（1976年初版、1985年第7版。I～III巻のうちの第III巻）で、3年生用の教科書である（全190ページ）。これは、1975年に発行された *Sejarah Nasional Indonesia I～VI* [Sartono et al. 1975] に基づいて、ヌグロホ・ノトスサントを編集主幹として中学校用に編纂されたもので、中学校用歴史の教科書では唯一の「国定」（1976年6月25日教育文化相決定）の教科書¹⁸⁾である。

同書の第III章「日本占領時代」には当時のインドネシアの政治・経済・社会などが概説されている。「ロームシャ」は同章の「人力の搾取」と題したところで、2ページにわたって詳しく説明されている（pp.76-77）。

同書には、日本語起源の語彙として Bogodan（「防護団」）、daidanco（「大団長」）、saikerei（「最敬礼」）、Borneo Konen [= nan] Hokokudan（「ボルネオ興南報国団」）、Fujinkai（「婦人会」、2回）、chudanchô（「中団長」、4回）、Keibodan（「警防団」、10回）、rômusya（「労務者」、15回）など、18語が合計81回出ている [左藤 1992: 227]。

A 2 [Martono 1987] の『社会科 — 歴史1 B』（1978年初版、1987年第11版）は1年生用の教科書である（全96ページ）。この教科書は、A 1の「補助教材」として、1980年9月9日に教育文化省初等中等教育総局の「検定」に合格し、インドネシア全国で使用する事が承認されている。その後、1986年の第10版までは内容に変更はなかったが、1987年の第11版になって一部の字句が変更された（p. 4）。

同書は「独立達成のためのインドネシア民族の闘争」の章と「民族の生活についての独立の意味」の章で日本占領期と独立宣言などを扱っており、「ロームシャ」は、「民族の生活にとっ

18) 1987年に発行された第9版 [Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 1987a] になると、1976年の決定に代わって、1987年1月2日に新たに教育文化相決定がなされたことが記されている（p. 3）。しかし本文の内容は、それ以前のものとまったく同じで、変更はない。

ての独立の意味」の章の「国内情勢」のところで取り上げられている (p.57)。

同書には、日本語起源の語彙として Jawa Hokokai (「ジャワ奉公会」, 3 回), Dokuritsu Zyunbi Tyoosakai (「独立準備調査会」), Heiho (「兵補」), Nippon (「日本」, 3 回), Yamato (「大和」), romusya (2 回) の 6 語が合計11回出ている [左藤 1992: 227]。

A 3 [Martono 1990] の『社会科 — 歴史 3 A』(1988年初版, 1990年第4版) は3年生前期用の教科書である (全224ページ)。本書は1987年の学習指導要領に基づいて、生徒の「実践的な副教材」として編纂され (p. 5), 1990年2月26日に教育文化省初等中等教育総局の決定によって「検定」に合格した教科書である。

同書の「インドネシア, 近代に入る」「インドネシア共和国」の各章で、日本占領期と独立宣言前後などが詳しく解説されている。「ロームシャ」¹⁹⁾ は III 「日本占領時代」の中の「人力の搾取」と題するところで、3 ページにわたって詳しく説明されている (pp.72-74)。

同書には日本語起源の語彙として Bundanco (「分団長」), Cuo Sangi In (「中央参議院」), Heiho (10回), Jawa Hokokai (10回), Kempeitai (「憲兵隊」, 2 回), Syuisintai (「推進隊」, 8 回), Yamato (7 回) など、23語が合計91回出ている [左藤 1992: 228]。

A 4 [Hassan Natawiredja 1987] の『社会科 — 歴史の手引き 3』は1987年の学習指導要領に基づき、「生徒の積極的学習方法」を重視して編纂された3年生用である (全109ページ)。

同書の第 I 章「インドネシア, 近代に入る」の C 「日本時代」には日本占領期のことが概説されており、「ロームシャ」は、日本の宣伝活動の説明の中で、インドネシア人の苦難の例として出ている (p.21)。

同書には日本語起源の語彙として Kimigayo (「君が代」), Seinendan (「青年団」, 5 回), Heiho (2 回), Keibodan (4 回), Jawa Hokokai (4 回), taiso (「体操」) など、8 語が合計22回出ている [左藤 1992: 227]。

A 5 [Nana Warnia; and Wiana Mulyana 1988] の『社会科 — 中学3年生用歴史』は1986年の社会科の学習指導要領に基づいて編纂された、3年生用である (全144ページ)。

同書の第 I 章「インドネシア, 近代に入る」と第 II 章「インドネシア共和国」の中で日本占領期とその後のことが概説されている。そしてジャワ奉公会が行った活動の一部に「ロームシャ」の徴用があったと説明している (p.37)。

同書には日本語起源の語彙として Fujinkai (2 回), Harakiri (「腹切り」), bushe [= shi] do (「武士道」), Nippon (7 回), Jibakutai (「自爆隊」), Jawa Hokokai (4 回) など、13語が

19) 同書にある、グループ研究用の「設問」には、「ロームシャ」(原文は“Romusa”となっている) など、日本占領期における5つの組織の設立目的を答えさせるものがある (p.86)。また「選択肢の設問」にも「ロームシャ」に関するものが出題されており (p.92), 「ロームシャ」を重視している編者の意図が明確に窺われる。

合計32回出ている [左藤 1992: 228]。

A 6 [Tugiyono 1988] の『社会科 — 中学3年生用歴史』は3年生の前期用である (全154ページ)。本書は、1975年の学習指導要領に基づいて編纂されたものだが、この科目に関しては1984年以降も変更はなく、「生徒の積極的学習方法」の教材として、1988年に新たに出版されたものである (pp. 5-6)。

同書の第III章「日本占領時代」には、当時のインドネシアの政治・経済・社会などが詳しく説明されている。「ロームシャ」は、「労働力の搾取」のところで取り上げられている (pp. 54-55)。

同書には日本語起源の語彙として Hokokai (「奉公会」, 3回), Syodanco (「小団長」, 2回), Sendenbu (「宣伝部」, 2回), Kaigun (「海軍」) など、16語が合計48回出ている [左藤 1992: 228-229]。

A 7 [Asmid Kamal Chaniago *et al.* 1992] の『民族闘争史教育 1』(1987年初版, 1992年改訂第8版) は、1985年の学習指導要領に基づいて編纂され、1992年に一部改訂された、1年生用である (全128ページ)。

同書の第3章「日本占領に対するインドネシア国民の抵抗」の中で、日本占領期に発生した抵抗のいくつかが説明されている。「ロームシャ」は、「ブリタールのペタ (郷土防衛義勇軍) の抵抗」のところに出現している (p. 28)。

同書には Cudanco (2回), Kidobutai (「城戸部隊」, 2回), Saikur [e] i など、7語の日本語起源の語彙が合計21回出ている [左藤 1993a: 138]。

A 8 [Iit Rasita *et al.* 1987] の『私はインドネシアを愛する — 民族闘争史教育副読本 1』は1年生用である (全114ページ)。「副読本」とあるが、これも「選定」の教科書の1種であり、1985年の学習指導要領に基づいて編纂されている (同書の「前書き」)。

同書の第3章は「日本占領に対するインドネシア国民の抵抗」と題されており、「ロームシャ」は、その中のB「日本占領時代」の中で、インドネシア人に対する日本のきびしい圧政の一例として取り上げられている (p. 17)。

同書には、日本語起源の語彙として Jawa Sentotai (「ジャワ戦闘隊」, 2回), Gakutotai (「学徒隊」) など、9語が合計19回出ている [左藤 1993a: 138]。

A 9 [Wiana Mulyana; and Ahmad D. Sarbini 1988] の『民族闘争史教育 — 中学校1年生用』は1986年の学習指導要領に基づいて編纂された1年生の後期用である (全182ページ)。

同書の第III章「日本の占領に対するインドネシア国民の抵抗」、第V章「一九四五憲法の制定と正副大統領の選出」、第XIII章「スラバヤ国旗事件」、第XIV章「愛国的独立闘争」の各章などが日本占領期に関連する内容である。「ロームシャ」²⁰⁾ は第III章で簡単に取り上げられている (p. 46)。

同書には、日本語起源の語彙として Bushido, Dokuritsu Junbi Cosakai, Domei (「同盟」, 3

回), Fujinkai (2回), Heiho (2回), Keibodan (2回), Kempe [i] tai, Ke [= Ki] dobutai, Nippon (4回), Romusha (6回), Seinendan (2回), Yamato (5回) の12語が合計30回出ている [左藤 1993a: 138]。

以上が本稿で取り扱う中学校の歴史の教科書とその中の日本占領期および日本語起源の語彙に関する概略である。科目が同じものは当然、内容構成が同じようになっているが、教科書ごとに日本占領期や「ロームシャ」に関する説明、日本語起源の語彙の語彙数などが異なっていることがわかる。

b. 高校の教科書

<資料>のB 1 [Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 1993] は、教育文化省による『高校用インドネシア国史 III』(1986年初版, 1993年第8版。I～III巻のうちの第III巻)で、3年生用である(全241ページ)。これは、1975年に発行された *Sejarah Nasional Indonesia I～VI* に基づいて編纂された、高校用歴史の唯一の「国定」教科書である。1991年の第7版から「改訂」されたことになっているが、第8版でも、表紙とごく一部の字句を除き、内容はまったく変更されていない。

同書の第III章「日本占領時代」には、当時のインドネシアの政治・経済・社会などが概説されている。「ロームシャ」は、同章のB「社会・経済的搾取」の中の「人力の搾取」のところで詳しく取り上げられている (pp.114-116)。

同書には日本語起源の語彙²¹⁾として Gakutotai, gunseikan (「軍政監」, 3回), Keimin Bunka Syidosyo (「啓民文化指導所」), Romukyokai (「労務協会」), Saikeirei など、48語が合計125回出ている [左藤 1993a: 139]。

B 2 [Sutrisno Kutoyo *et al.* 1986] の『高校用世界史 第III巻』(1975年初版, 1986年第4版) は3年生用の世界史である(全255ページ)。同書は、元々は1975年のカリキュラム実施の前に編纂されたものだが、1982年の改訂版は教育文化省初等中等教育総局の「検定」に合格し、B 1の「副読本」として承認されたものである。それは1975年のカリキュラム実施の一環として、要点のみをまとめてある教育文化省発行の教科書を補う形で、世界史の背景などを説明したものとなっている(第3版の「前書き」)。

同書は、世界を6地域に分けて概説している。そのII「アジア」の4「東南アジア」の中の「インドネシア」に日本占領期の説明があり、「ロームシャ」は、その中で取り上げられて

20) 同書では、3カ所 (pp.48, 50, 176) の「練習問題」で「ロームシャ」が取り上げられている。そのうちの一つは「ロームシャの意味するものは何ですか」という設問である (p.50)。

21) 同書に出ている日本語起源の語彙に関しては、西村 [1992] が、その一部を取り上げ、「いずれも、日本占領期における教育の特色を言い表すキーワードである」(p.291) と指摘している。

いる (pp.92-93)。

同書には日本語起源の語彙として fujinkai, heiho, Jawa Hokokai (3回) など、合計8語が14回出ている [左藤 1992: 248]。

B 3 [Tugiyono *et al.* 1987] の『インドネシア国史 II』は高校2年生用である (全156ページ)。

同書の「前書き」によれば、「インドネシア史・世界史」(1984年のカリキュラムから全高校の必修科目となった [p. 5]) の学習指導要領が出される前に「資料」として使用が義務付けられていたのは *Sejarah Nasional Indonesia Untuk SMA* (I ~ III) と *Sejarah Umum Indonesia Untuk SMA* (I ~ II) の2種類であったが、両書は学年と学期の区分に合わず、現場の教師が困っており、その困難を克服するために編纂されたのが本書のB 3である (pp. 5-6)。

同書の第IV章「日本占領期 (1942-1945年)」は、6つの節に分けられており、「ロームシャ」はその中のD「日本の圧政の諸形態」(pp.144-149) の中で取り上げられている。

同書には、日本語起源の語彙として Meiji (「明治」), kandji (「漢字」), katakana (「カタカナ」), Sendenbu (3回) など、22語が合計43回出ている [左藤 1992: 251]。

B 4 [Tugiyono *et al.* 1987] の『高校民族闘争史教育 1』(1987年初版, 同年第2版) は、1985年の学習指導要領に基づいて編纂された1年生用である (全240ページ)。同書の第IV章から第X章までが日本軍政に関連した内容であり、「ロームシャ」は、第IV章「日本占領期における国民の苦難」の中の「人力の搾取」(pp.96-107) の中で取り上げられている。

同書には、日本語起源の語彙も多い。Gunseikan (5回), Dai Nippon Tai [= Tei] koku (「大日本帝国」), Keibodan (11回), hokoseisyin (「奉公精神」), kumiai (「組合」, 3回), Romukyokai, Heiho (14回) など、80語が合計296回出ている [左藤 1992: 250-251]。

B 5 [Eddy Jusuf *et al.* 1992] の『民族闘争史教育 — 高校1年生』(1987年初版, 1992年第4版) も、1985年の学習指導要領に基づいて編纂されたものである (全95ページ)。同書の第III章から第V章までが日本占領期に関連する内容である。第III章「日本占領期におけるインドネシア国民の苦難」では、「ロームシャ」が、Kinrohosi (「勤労奉仕」) などとともに、日本占領期における国民の苦難の例として説明されている (pp.52-53)。

同書には、日本語起源の語彙として Sanyo (「参与」), Tonarigumi (「隣組」), Shu Sangi-Kai (「州参議会」) など、24語が合計51回出ている [左藤 1993a: 139]。

以上が、本稿で取り扱う高校の歴史の教科書とその中の日本占領期および日本語起源の語彙に関する概略である。

表1は、中学校と高校の歴史の教科書における日本語起源の語彙数, 「日本軍政関連用語」²²⁾

22) 「日本軍政関連用語」とは、日本占領期における軍政と直接・間接に関連のある語彙を指す。

左藤：インドネシアの歴史教科書における「ロームシャ」について

表1 中学校・高校の歴史の教科書における日本語起源の語彙数と
「日本軍政関連用語」の語彙数および「ロームシャ」の回数

教科書	日本語の 語彙数(語)	日本軍政関連 用語の語彙数	ロームシャの 回数(回)
A 1	18	18	15
A 2	6	6	2
A 3	23	23	12
A 4	8	8	2
A 5	13	12	3
A 6	16	16	13
A 7	7	7	2
A 8	9	9	1
A 9	12	11	6
B 1	48	47	15
B 2	8	7	3
B 3	22	21	6
B 4	80	80	22
B 5	24	24	6
合計	294	289	108
平均	21.0	20.6	7.7

注) A 1～A 9＝中学校, B 1～B 5＝高校の＜資料＞の記号

の語彙数および「ロームシャ」の回数をまとめたものである。同表から、教科書毎に、それらの語彙の取扱い頻度にはばらつきがあることがわかる。これは「社会科」の「歴史」、「民族闘争史教育」、「世界史」など、教科書の種類の違いを考慮に入れたとしても、日本語起源の語彙の扱いに関して、それを重視して、多くの語彙を取り上げているもの（例えば、A 1, A 3, B 1, B 4）から、それほどでもないもの（例えば、A 2, A 7, B 2）まで、教科書の編者の考え方がかなり反映されていることを示していると言えよう。

III 「ロームシャ」について

1) 「ロームシャ」の意味

中学校および高校の教科書において「ロームシャ」の意味がそれぞれいかに説明されているかを＜資料＞の順に見ていこう。

A 1では、「ロームシャ」の意味の直接的な説明はないが、「彼らは日本側によって強制的に働かされた」(p.76)という説明がなされている。

A 2では、「強制労働部隊」(barisan kerja paksa) (p.57) と説明されている。

A 3では、「強制労働者」(pekerja paksa) という説明が2カ所に出ている (pp.71-72)。

A 5では、最初に「ロームシャ」が出てきた際には「労働力」(tenaga pekerja) と説明されている (p.36) が、次に出てきた時には、「強制労働者」と説明されている (p.37)。

A 6の本文には「ロームシャ」の意味の直接的な説明はなく、「彼らは日本側によって強制的に働かされた」という説明があるだけだが、「ロームシャ」の働いている場面の写真説明には「強制労働力」(tenaga kerja paksa) とある (p.54)。また本文の後には「選択肢の試験」があり、その中では「ロームシャ」を「強制労働」(kerja rodi) と説明しているところが2カ所 (pp.62, 64) あり、「勤労戦士部隊」(barisan prajurit kerja) と説明しているところもある (p.62)。

A 4, A 7, A 8, A 9には、「ロームシャ」の意味の説明はまったくない。

B 1には「ロームシャ」の意味の直接的な説明はないが、最初に出てきた時には「国民はロームシャにさせられ、日本の軍事施設で強制労働を行った」(p.113) と説明されている。その後、「ロームシャの仕事は身の毛のよだつような強制労働であった」との説明があり、さらに日本側は、国民が「ロームシャ」の悲惨さを口コミで知り、「ロームシャ」になることを恐れないようにと「ロームシャは経済戦士あるいは勤労英雄である」というキャンペーンを行ったと説明している (p.115)。

B 2では、最初、「ロームシャ」の意味を「労働力」(tenaga pekerja) と説明している (p.92) が、その後では「強制苦力」(kuli paksa) と説明している (p.93)。

B 3では、「わが国における植民地的経済搾取」という時代別区分表の中では「ロームシャ」の意味をたんに「労働力」(tenaga kerja) と説明している (p.47)。しかし「ロームシャ」の働いている場面の写真説明には「強制労働力」とある (p.147)。

B 4でも、「わが国における植民地的経済搾取」という時代別区分表の中では「ロームシャ」の意味をたんに「労働力」と説明している (p.26)。しかし本文には、「国民はロームシャにさせられ、日本の軍事施設で強制労働を行った」とあり、B 1と同じ説明となっている (pp.94-95)。またB 1と同じく「ロームシャは経済戦士あるいは勤労英雄である」というキャンペーンを行ったという説明もある (pp.97-98)。さらにその後には「ロームシャ部隊」を「勤労戦士部隊」と説明している (p.98)。一方、「ロームシャ」の働いている場面の写真説明には「強制労働力」とあり (p.100)、B 3と同じ説明となっている。

B 5では、「ロームシャ」の意味を第III章では「戦士勤労部隊」(barisan kerja prajurit) (p.53) と説明しているが、第IV章では「強制労働の性格をおびた、国民の人材徴用を助けるための勤労戦士部隊」と説明している (p.63)。

表2 中学校・高校の歴史の教科書における「ロームシャ」の意味別分類表

	強 制 労 働	強 制 労 働 者	強 制 労 働 部 隊	強 制 苦 力	労 働 者 (力)	勤 労 戦 士	勤 労 英 雄	経 済 戦 士
A 1		◇						
A 2			○					
A 3		◎						
A 4								
A 5		○			○			
A 6	◎	○				○		
A 7								
A 8								
A 9								
B 1		◇					○	○
B 2				○	○			
B 3		○			○			
B 4		◎			○	○	○	○
B 5						◎		
合 計	1	7	1	1	4	3	2	2

注) A = 中学校

B = 高校

○印 = 直接説明のあるもの

◎印 = 2カ所以上に説明のあるもの

◇印 = 間接説明のあるもの

表2は中学校と高校の歴史の教科書における「ロームシャ」の意味別分類表である。14種類の教科書のうち7種類が「ロームシャ」の意味を「強制労働者」と説明している。「強制労働」「強制労働部隊」「強制苦力」がそれぞれ1種類ずつあり、「強制」とつくものが延べで10種類(一部の間接説明と重複したものを含む)となる。しかし、「労働者(力)」と説明してあるものは4種類しかないことがわかる。

一方「勤労戦士」が3種類、「勤労英雄」と「経済戦士」がそれぞれ2種類ある。

以上のことから、中学校と高校の歴史の教科書における「ロームシャ」の意味は、教科書によってばらつきがあり、さらに同じ教科書でも統一されていないものもあるが、全体としてみると、日本語の本来の意味とはかなり異なった意味説明がなされているものが多く、言語学的には「特殊化」されていると言えよう。

2) 「ロームシャ」に関する記述内容

「ロームシャ」に関する記述内容を分析するために、以下では、「動員」「実態」「人数」「派

表3 中学校・高校の歴史の教科書における「ロームシャ」に関する記述内容の分類表

	動 員 *	実 態 **	人 数	派 遣 先	結 果	評 価
A 1	○	○	○	○	○	◎
A 2	○	○	○	○	○	
A 3	○	○	○	○	◎	
A 4		○			○	
A 5	○			○		
A 6	○	○	◎	◎	◎	
A 7					○	
A 8	○					
A 9	○					
B 1	◎	◎	○	○	◎	○
B 2	○			○		
B 3	○	○	◎	◎	○	
B 4	◎	◎	◎	◎	◎	○
B 5	○	○	○	○	○	
合 計	12	9	8	10	10	3

注) ○印=直接説明のあるもの

◎印=2カ所以上に説明のあるもの

* 「動員」には徴用の理由や方法などを含む。

** 「実態」の中には、労働状況、取り扱い、食べ物、健康などを含む。

遣先」「結果」「評価」²³⁾の6項目に分けて、それぞれ検討していく。

a. 「動員」

まず「動員」に関しては、表3のように12種類の教科書が何らかの説明をしている。以下では、<資料>の順にその記述内容を検討していこう。

A1は、「動員」の方法に関して、「ロームシャたちは、大半が村落から徴用され、それも一般的には学校を出ていないか、せいぜい小学校卒の人々であった。最初、彼らは甘い言葉で

23) 「動員」には、「ロームシャ」の徴用の理由や方法などを含めている。「実態」には、「ロームシャ」の労働状況、取り扱い、待遇、食べ物、健康などを含めている。「結果」には、「ロームシャ」の徴用の結果、死亡したり行方不明になったとか、出身村落への影響があったなどの説明を含めている。「評価」には、これまで「ロームシャ」に関しては「マイナス」面の見方しかされなかったことに「プラス」面の説明をしているものを取り上げた。

ロームシャになるように勧誘され、甘言で成功しないと、強制された。²⁴⁾ 人口稠密な島であるジャワ島は大々的な労働力動員が可能であった」と述べている。さらに同書では、当初「ロームシャ」への応募は志願制であったし、「人材の動員は、人々が、大東亜共栄のためという宣伝の影響を受けていたために、それほど困難ではなかった」が、その後「ロームシャ動員は強制と感じられるようになり、重い負担になっていき」、「任地へ派遣されることを嫌がったので、日本側は強制を行った」。そのため、ほとんどすべての健康な男子が徴用され、「村に残ったのは、女子供と身障者だけになった」(pp.76-77)と説明している。

A 2は、戦争の必要のために民衆を動員するという方法で人力の搾取が行われ、「民衆はロームシャ、すなわち強制労働部隊になるために動員された」(p.57)と簡単に説明している。

A 3は、「最もひどい目にあったのは、強制労働者(ロームシャ)となるために徴用された人たちであった。彼らは村落の出身であり、一般的には読み書きができなかった。教育が最もあった者でも小学校卒であった」(pp.72-73)と述べ、その後、「ロームシャとしての国民の徴用は、戦争のためにいろいろなプロジェクトを準備しようとしていた日本を支援することを目的としていたことは明らかである」(p.74)と説明している。

A 5は、ジャワ奉公会が行った活動の一部に「ロームシャ」の徴用があったことにふれている(p.36)。そして「国民生活が極めて苦難に満ちていた最中に、日本は、村の農民や都市の労働者を動員して防衛の砦、鉄道、道路を構築するための強制労働者(ロームシャ)にしたのである」(p.37)と述べている。

A 6は、「ロームシャ」の人材は大半が村落の農民たちから徴用された、とだけ説明している(p.54)。

A 8は、「食糧不足の国民がロームシャという仕事に動員された」と、簡単に説明している(p.17)。

A 9は、「その人材の動員は村落ばかりではなくて、都市でも行われた」と、やはり簡単に説明している(p.46)。

B 1は、まず、国民は「ロームシャ」になることを強制され、日本の軍事施設で強制労働をさせられた。「ロームシャ」の大部分が農民だったので農業に従事する人数が減ったと説明している(p.113)。そして人材は人口の稠密なジャワ島の村落から大々的に集められた。当初は志願によるもので、任地も居住地からそれほど遠くはなかった。またおおげさな宣伝も行わ

24) 軍政の当初は「志願制」であり、「軍政当局は、ロームシャは自由意思で応募することを鉄則としており、事実そうであったかのようにみせかけていた」ために「自発的に応募した」者もいた、という[倉沢 1992:191, 218]。また、当初は苦力的な性格を持つ労務者よりも、むしろ資源開発のための一般的な労働力という性格が強かったが、後には「大量かつ迅速な労務調達」を達成するために、失業者の「強制的徴用」など、現実的には「もっと生々しい方法」もとられ[後藤 1989a: 71, 80]、「甘言、脅しなどありとあらゆる圧力がかけられた」[倉沢 1992:218]といわれる。

れ、いくつかの町では、「ロームシャ部隊」が設立されたと述べた後、当初は志願による人材動員であったが、次第に強制的なものに変化していき、各村落は一定の割り当てにしたがって一定数の「ロームシャ」を供給することが義務付けられ、「ロームキョーカイ」（労務協会）と呼ばれる徴用委員会が各地に設立されたと説明している。さらに、一般的には農民であった「ロームシャ」の仕事は「身の毛のよだつような強制労働である」という「悪いニュース」が公然の秘密となっていくと、国民は「ロームシャ」になることを恐れるようになった。国民の恐怖心を取り除き、その秘密を隠すために、1943年から日本は、「ロームシャ」は「経済戦士」「勤労英雄」²⁵⁾であるという新しいキャンペーンを始め、「日本の軍隊のために神聖な任務を遂行する戦士」というイメージが与えられた、と説明している (p.115)。

B 2は、1944年に設立されたジャワ奉公会の活動の中に、稲、宝石、古鉄、ひまの実、それに労働力（ロームシャ）を集めるために国民の動員があった、と述べた後 (p.92)、「ロームシャ」については、「村の農民たちや都市の労働者たちの多くが、日本のために鉄道、飛行場、要塞を建設するためのロームシャ、すなわち強制苦力にさせられた」(p.93)と説明している。

B 3は、村では若者たちがたくさん捕まえられ、「ロームシャ」として働かされるために他の占領諸国、特にビルマへ送られた (p.145)とだけ説明している。

B 4は、国民は「ロームシャ」になることを強制され、日本の軍事施設で強制労働を行った (pp.94-95)と説明した後、戦争行為の一環として、日本は、壕、地下倉庫、緊急用飛行場などを含めた軍事施設を建設するために、できるだけ多くの肉体労働者を必要とした。人材は、人口が最も稠密で、大々的な徴用が可能であり、労働力の源泉となったジャワ島の村落から得られた (pp.96-97)、と「ロームシャ」の「必要性」と「供給地」について述べる。そして「ロームシャ」の供給は、当初は自発的であり、任地も住民の住居からそれほど離れてはいなかった。そして「村落の相互扶助の精神の厚さ」に加えて「大々的な宣伝が行われた」ために、動員はそれほど困難だったわけではない。それどころか「いくつかの町では宣伝手段としてロームシャ部隊が設立された」と説明している。その後にB 1と同じように、動員が「自発的」から「強制的」になったこと、「ロームキョーカイ」の設立のこと、「経済戦士」「勤労英雄」のキャンペーン展開による「日本軍のために神聖な任務を果たす戦士」というイメージ作りのことなどが詳しく説明されている (pp.97-98)。そして「ロームシャ」は、シャム、ビルマなどのような東南アジアの占領地域で、軍事基地、要塞、道路、橋を建設するために徴用さ

25) 1943年9月の中央参議院発足以来ずっとこう呼ばれ、スカルノ（初代大統領）も「ロームシャ」を「勤労戦士」と称揚する上で重要な役割を果たしたと言われる [後藤 1989a: 93; 倉沢 1992: 227]。スカルノ自身も、その自伝の中で、現実には「奴隷」であった「ロームシャ」を「徴募する任務をとっていたのが私であった」と述べ、また、頭に熱帯用のヘルメットをかぶり、手にシャベルを持って「ロームシャ」になることが「なんと容易で栄光に満ちたことかを示すような写真を撮らせた」ことを認めている [Adams 1966: 292; スカルノ 1969: 251]。

れた、と再び述べている (p.98)。

B 5 は、「需要に応じた労働力を獲得するために、各村落ではロームシャを徴用することが義務付けられ、各地にロームキョーカイという国民の人材徴用委員会が設立された」と述べた後、東南アジアの日本占領地域で軍事基地、防衛の砦、道路・橋の建設のために何十万という「ロームシャ」がジャワから徴用された、と説明している (p.53)。

以上が「ロームシャ」の「動員」に関する記述内容である。A 4, A 7 のように、「動員」に関する記述のまったくないものと A 1, B 1, B 4 のように詳しい説明のあるものまで、さまざまである。

b. 「実態」

「ロームシャ」の「実態」に関しては表 3 のように、9 種類の教科書に説明がある。

A 1 は、「ロームシャ」は日本側によって特に飛行場を建設したり、要塞や鉄道を構築したりといった軍事目的のために強制的に働かされたと述べた後、「ロームシャに対する待遇は極めて悪かった。健康は保証されず、食べ物は不十分であったし、労働はあまりにもきつかった。その結果、任地で死んだロームシャが多かった」(p.76) と説明している。

A 2 は、「ロームシャ」たちは飛行場、要塞、防空壕、鉄道を作るために働くことを強制された。何千人もの「ロームシャ」が、インドネシアからマラヤ、タイ、ビルマへ送られ、その中の多くは働いていたジャングルで死んだ (p.57) と説明している。

A 3 は、最もひどい目にあったのは、強制労働者 (ロームシャ) となるために徴用された人たちで、橋、幹線道路、飛行場、要塞、防空壕のように、日本の防衛に必要な、いろいろな施設を建設するために働くことを強制された (pp.72-73) と説明してから、ジャワ島出身の何千人もの人々がジャワ島外の森林で働かされたが、「ロームシャたちの仕事は非常に重労働であった。ジャングルで木を切り倒したり、丘をならしたり、山で碎石などをした」と、「ロームシャ」の仕事内容を具体的に説明している (p.73)。さらに「ロームシャ」の取り扱いや待遇などについては次のように詳しく述べている。

ロームシャたちに対する日本軍の取り扱いは極めてひどかった。仕事を少しでもなまけていると、平手打ちにされたり、銃の台尻でなぐられたり、むちで打たれたり、足で蹴られたりした。これに反抗しようとした者は殺された。一方、彼らの健康には注意が払われなかった。衣服は不十分であった。食べ物は与えられたが、米の御飯ではなく、タピオカの粉のおかゆであった。それも一日一回だけであり、その量はとても少なかった。
(p.73)

A 4 は、「ロームシャ」に関して、インドネシア人の苦難の例として取り上げ、「ロームシャ」は極めて残酷な扱いを受けた。非常な重労働、食べ物不足、伝染病、日本人による拷問などで多くの者が死んだ。また、秘密の軍事プロジェクトで働かされていた者は、仕事が終わると殺された (p.21) と説明している。

A 6 は、「ロームシャ」に対する取り扱いは極めてひどかった。健康は保証されず、食べ物は不十分で、仕事はあまりにもきつかった。その結果、多くの「ロームシャ」が任地で死亡した (pp.54-55) と簡単に説明している。

B 1 は、「ロームシャ」の取り扱いなどについて、「現場では、宣伝や壮行会とは異なって、彼らは手荒に扱われた。健康は保証されなかったし、食べ物は不十分で、仕事は非常に過酷であった。ロームシャの多くが病気、食料不足、疲労、事故のために現場で死亡した」 (p.115) と説明している。

B 3 は、本文では「実態」についてはふれていないが、「ロームシャ」のイラストが載せてあり、それには、「日本占領期のある場所におけるロームシャの悲惨さと貧しさに関する絵」という説明がある (p.148)。

B 4 は、「ロームシャ」に対する取り扱いなどについて、B 1 と同じように、「ロームシャ」は「労働現場では、宣伝や壮行会とは異なって、ひどい扱いを受けた。健康は保証されず、食べ物は不十分であり、労働はきわめて過酷であった。ロームシャの中の多くは、病気、食料不足、疲労、事故などにより、現場で死亡した」 (p.97) と説明した後、「このロームシャの大部分は、飢え、渇き、強制労働の際の虐待によって死亡したために再び故郷に帰ることはなかった」 (p.98) と再び述べている。

B 5 は、東南アジアの日本占領地域で、軍事基地、要塞、道路、橋を建設するために徴用された「ロームシャ」の大部分は、飢え、渇き、強制労働の際の虐待によって死亡した (p.53) と説明している

以上が「ロームシャ」に関する「実態」の記述内容である。A 5, A 7 などのように、「実態」に関する記述のないものもあるが、大半は、「ロームシャ」のおかれた状況を具体的に説明して、その過酷さを強調している。

c. 「人数」と「派遣先」

「ロームシャ」の「人数」に関しては14種類の教科書のうち8種類に記述がある (表3)。

A 1, A 2, A 3 はいずれも「数千人も」となっている。

A 6 は、本文では「ジャワ島から動員された人数」として「数千人も」と記述している (p.55) が、写真の説明文では、国外へ派遣された人数は30万人、そのうち23万人が死亡、約7万人だけが「非常に悲惨な肉体的状態で戦後発見された」とあり (p.54)、「本文」と写真

の説明文の数字がまったく異なっている。

B 1 は、推定で30万人がジャワ島外へ派遣され、「7 万人が悲惨な状態」であったと説明している (p.116)。

B 3 は、本文では、ジャワ島から動員された人数として「数百万人」と記している (p.145) が、写真の説明文では、A 6 と同じく、国外へ派遣された人数は30万人、そのうち23万人が死亡、約7 万人だけが「非常に悲惨な肉体的状態で、戦後発見された」とあり (p.147)、やはり「本文」と写真の説明文の数字がまったく異なっている。

B 4 は、本文ではジャワ島から動員された人数として「数十万人」と記述しているが、国外へ派遣された「ロームシャ」は30万人と推定しており、約7 万人だけが「非常に悲惨な肉体的状態で、帰郷できた」と説明している (p.98)。また、写真の説明文には、A 6 や B 3 と同じく、国外へ派遣された人数が30万人、そのうち23万人が死亡、約7 万人だけが「非常に悲惨な肉体的状態で、戦後発見された」とある (p.100)。

B 5 は、「数十万人」がジャワから徴用されて東南アジアへ派遣されたが、その「大部分」は帰郷することはなかった、と記している (p.53)。

A 6、B 3、B 4 は同じ著者（共著者は異なる）で、写真の説明文の数字はいずれも同じだが、本文に出ている「ロームシャ」の人数をそれぞれ「数千人」「数百万人」「数十万人」と書いており、大きな違いがある。

以上のように、教科書によって「ロームシャ」の人数はまったくバラバラである。「ロームシャ」の実数が不明であること、インドネシア側の統一見解がないことなどがその原因であろう。

一方、「ロームシャ」の「派遣先」に関しては、10種類の教科書が具体的な国名・地名をあげている。

A 1、A 2、A 5、B 2、B 5 はそれぞれマラヤ、タイ、ビルマをあげているが、A 3 はそれに加えてインドシナをあげている。

A 6 は、本文ではマラヤ、タイ、ビルマをあげているが (p.55)、写真の説明文では、それ以外にイリアン、マルク、スラウエシもあげている (p.54)。

B 1 は、マラヤ、タイ、ビルマに加えてベトナムとサラワクをあげている。

B 3 は、本文でビルマをあげ (p.145)、写真の説明文では、それ以外に、タイ、マラヤ、イリアン、マルク、スラウエシをあげている (p.147)。

B 4 は、本文でマラヤ、タイ、ビルマをあげ (p.98)、写真の説明文ではそれ以外にイリアン、マルク、スラウエシをあげている (p.100)。

以上が「ロームシャ」の「派遣先」に関する各教科書の記述内容である。大半の教科書がマラヤ、タイ、ビルマを「派遣先」にあげていることがわかる。

d. 「結果」と「評価」

「ロームシャ」の「結果」に関しては表3のように、10種類の教科書に記述がある。

A 1は、「ロームシャは村落の農民たちから徴用されたので、村落の経済状態に影響を及ぼした。農家の働き手が他の場所で使われたために村落経済は次第に衰退していった」と、「ロームシャ」徴用による村落経済への影響について言及した後、「ロームシャ」として派遣されることを恐れて、多くの若い農民が村から消え、またほとんどすべての健康な男子が徴用されたので、村に残ったのは、女子供と身障者だけになった。そのため、「ロームシャ」としての労働力動員はインドネシアの社会構造にも影響をもたらした、と説明している(pp.76-77)。さらに、「ロームシャ」に対する待遇が極めて悪く、健康は保証されず、食べ物も不十分で、労働があまりにもきつかったので、任地で死んだロームシャが多かった(p.76)と、説明した後、郷土防衛義勇軍の兵士たちが、ブリタール地区で働かされている間に死んだ「ロームシャ」の多さなど、国民の悲惨な状態を見るにみかねてブリタール反乱事件を起こした(p.80)と述べている。

A 2は、数千人もの「ロームシャ」が、インドネシアからマラヤ、タイ、ビルマへ送られ、その多くが働いていたジャングルで死んだ(p.57)と簡単に述べている。

A 3は、「数千人のロームシャが故郷へ再び戻ることはなかった。彼らは働いていたジャングルで死亡した。そうした現実を見て、多くの村の青年たちが村から消えた。強制的にロームシャにさせられるのを恐れて逃げ出したため、村の農業にも影響が及んだ」(p.74)と説明している。また、同書の別のところには、日本時代に農産物が激減した理由がいくつかあげてあるが、その中に、「多くの国民がロームシャ(強制労働者)になることを強制されたために水田を耕す労働力が次第に減っていった」(p.71)という記述がある。

A 4は、「ロームシャ」は極めて残酷な扱いを受け、非常な重労働、食べ物不足、伝染病、拷問などで多くの者が死んだし、秘密の軍事プロジェクトで働かされていた者は、仕事が終わると殺された、と説明した後、日本の行った種々の残酷行為によって、当初、オランダを追い払ったことで日本の到来を歓迎していたインドネシア人が、手のひらを返すように、各地で抵抗するようになったと述べている(p.21)。

A 6は、「ロームシャ」が村の農民たちから徴用されたために、村の経済状態に影響が及び、農家の働き手が他の場所で使用されたために村の経済は次第に衰退していった。またその一方で、「ロームシャ」に対する取り扱いは極めてひどく、健康は保証されず、食べ物も不十分で、仕事があまりにもきつかったため、多くの「ロームシャ」が任地で死亡した(pp.54-55)と説明している。また、同書には、「ロームシャ」が働いている場面の写真が載っており、その説明には、ジャワ島外へ運ばれた「ロームシャ」の数は30万人にのぼると推定されているが、このうち、わずかに7万人程は、戦後、肉体的に非常に悲惨な状態で発見されたが、約23万人

は強制労働者、すなわち「ロームシャ」のまま死亡した (p.54) とある。

A 7 は、郷土防衛義勇軍の兵士たちが、国民の悲惨な状態とブリタール地区で働かされている間に死んだ「ロームシャ」の多さを見るにみかねてブリタール反乱事件を起こしたと指摘している (p.28)。

B 1 は、国民は「ロームシャ」になることを強制され、日本の軍事施設で強制労働をさせられた。その大部分が農民だったから農業に従事する人数が減った。この政策は実際は生産向上の理念とは相容れないものであり、政府の措置は国民に一連の困難をもたらした (pp.113-114) と指摘した後、「ロームシャ」は一般的には農民であったため、この徴用は村落経済に大きな影響をもたらした (p.115) と説明している。また、現場では、宣伝や壮行会とは異なって、「ロームシャ」は手荒に扱われ、健康は保証されず、食べ物は不十分で、仕事が非常に過酷であったために、その多くが病気、食料不足、疲労、事故のために現場で死亡した (p.115) と記述している。さらに、同書でも、推定で30万人の「ロームシャ」がジャワ島外へ送られ、7万人が「悲惨な状態であった」と見積られている (p.116) と述べているし、「ロームシャ」の悲惨な姿を目撃して、見るにしのびず、心を動かされたことが、ブリタール郷土防衛義勇軍兵士たちが反日抵抗運動に立ち上がる原因となったと説明している (p.120)。

B 3 は、ジャワの農村では若者たちがたくさん捕まえられ、「ロームシャ」として働かされたために、数百万人の青年が島外へ送られ、その大半が行方不明となり、その運命もわからなくなった (p.145) と説明している。

B 4 は、国民が「ロームシャ」になり、日本の軍事施設で強制労働することを強制され、その大部分が農民であったから農業をする人の数が減った (pp.94-95) と述べた後、「ロームシャ」の徴用による労働力不足や食料不足などが村落の社会・経済に大きな影響を及ぼした、と説明している (pp.96-97)。さらに「ロームシャ」に対する取り扱いがひどかったために、その中の多くは、病気、食料不足、疲労、事故などにより、現場で死亡した (p.97) と記してから、「このロームシャの大部分は、飢え、渇き、強制労働の際の虐待によって死亡したために、再び故郷に帰ることはなかった」 (p.98) と、再び説明している。

B 5 は、強制労働期間中に飢え、渇き、拷問のために大部分の「ロームシャ」が帰郷できなかった、と簡単に説明している (p.53)。

以上が「ロームシャ」の「結果」に関する説明内容である。いずれも基本的には、「ロームシャ」徴用による村落社会・経済への影響と多数の「ロームシャ」の死亡（一部にはさらに、それによるブリタール反乱の発生）を取り上げている。

一方、「ロームシャ」に関する「評価」をしている教科書は、表3にあるように、3種類ある。それらにどのように記述されているかを次に検討していく。

A 1 は、「ロームシャ」動員のプラス面について、無事に村へ戻った「ロームシャ」たちは

いろいろな分野において多くの経験を経ており、新しい考えをもたらしたので、村は変化をとげた。町へ逃げていて、帰省した者たちも同様に新たな経験を持ち帰り、村でずっと農民として暮らしていた者たちに比べて地位が高くなった (p.77) と述べている。

B 1 も、「ロームシャ」動員のプラス面について、インドネシアの各村落での徴用は幅広い社会的変化を引き起こした。「ロームシャ」たちや町へ逃げていた青年たちは様々な新しい体験をして、日本の降伏後、それぞれの村へ戻った。こうした諸々の出来事によって、各村落は孤立を脱して、開かれたものになっていった (p.116) と説明している。

B 4 は、「ロームシャ」の徴用が、インドネシア、特に人口稠密なジャワに「悪い面」ばかりをもたらしたわけではない、と前置きした後、B 1 と同じように、インドネシアの村落における「ロームシャ」の徴用による幅広い社会的変化と、彼らが日本の降伏後、新しい体験を持ち帰ったことから、村落が孤立を脱し、開かれたものになっていった (p.99) と述べている。

以上が「ロームシャ」に関する「評価」についての記述内容である。こうした「評価」はいずれも、A 1、B 1 の教科書の編者であるヌグロホ・ノトスサントの日本軍政に対する見方・考え方を明確に反映している²⁶⁾ と言えよう。

IV おわりに

本稿では、インドネシアで、1984年度から1993年度までに使用された、中学校と高校の歴史の教科書14種類(「国定」2種類、「検定」3種類、「選定」9種類)における「ロームシャ」の意味とその記述内容に関する検討を行った。

「ロームシャ」の意味に関する説明を分類した結果(表2)、14種類の教科書のうち7種類が「強制労働者」と説明しており、「強制労働」「強制労働部隊」「強制苦力」(いずれも1種類)など、「強制」とつくものが延べで10種類ある。さらに「勤労戦士」(3種類)や「勤労英雄」「経済戦士」(いずれも2種類)もあって、たんに「労働者(力)」と説明しているものは4種類しかなく、日本語本来の意味合いとは異っているものが多い。したがって、これらの教科書の中では「ロームシャ」の意味が言語学的には「特殊化」されていると言えよう。

本稿において検討してきた結果から、インドネシアでは、中学校と高校の歴史の教科書で、「動員」(12種類の教科書)、「実態」(9種類)、「人数」(8種類)、「派遣先」(10種類)、「結果」

26) ヌグロホ・ノトスサントは、[Nugroho Notosusanto 1975: 139-140] の中で「ロームシャ」動員に関してプラス面の「評価」もしている。ただし、アイブ・ロシディ(大阪外国語大学客員教授)によれば、「ロームシャ」に関してポジティブな評価をしているのはヌグロホだけであり、一般的にはネガティブに評価しているという(Ajip Rosidi とのインタビュー。1992年11月12日、於：三重県賢島)。

(10種類)などの具体的な記述・説明を通じて、「ロームシャ」に関して(取り上げ方にかなりばらつきはあるが)、基本的には「悲惨な強制労働者」というイメージ²⁷⁾を生徒²⁸⁾に与えようとしていることが明らかとなった。ここに、インドネシア側が「ロームシャ」をいかにとらえ、それを学校教育でいかに教えようとしているか、ということが明確にあらわれていると言えよう。

今後の重要な課題²⁹⁾としては、インドネシアの社会・歴史の教科書の中で日本軍政全体はいかに記述されているか。また、他の日本語起源の語彙(特に日本軍政と関係の深いもの)はいかに記述されているか、などがある。

これらがいずれも、日本軍政がインドネシアの教育・言語面に及ぼしたインパクトを研究する際には必要不可欠なものであることは言うまでもない。今後、稿を改めて、検討していきたい。

謝 辞

本稿をまとめるに際しては、京都大学の西村重夫助教授、摂南大学の山口真佐夫講師、同大学図書館の<バライ・プスタカ文庫>、京都産業大学の松岡邦夫教授と粕谷俊樹教授に貴重な資料を提供していただいた。また草稿の段階で、桃山学院大学の深見純生助教授と京都産業大学の大城光正教授、それに本誌のレフェリーには有益で貴重なコメントをいただいた。ここに記して、心より感謝の意を表したい。

<追記>

この拙稿を、学界から非常に惜しまれつつも、去る2月27日に急逝された、故土屋健治先生に捧げます。

学生時代から二十数年間にわたり、浅学非才な私を、お目にかかるたびに、常に優しいお言葉で激励していただいた、土屋先生に改めて心より感謝し、ご冥福をお祈りします。

-
- 27) 「ロームシャ」の具体的なイメージを与えるために、「ロームシャ」が働いている場面の写真やイラストなどを載せているものとして、中学校の教科書では、A 1, A 3, A 6の3種類があり、高校の教科書でもB 3, B 4, の2種類がある。
- 28) 生徒の側が「ロームシャ」をいかにとらえているかということを研究することは非常に重要であり、今後の課題の1つであるが、ここには具体例として2例だけ示しておきたい。それは、インドネシアの独立30周年を記念して実施された作文コンクールの入賞作品の中の2点(高校3年生の男子と女子の作品)で、ともに一部で「ロームシャ」にふれている[Dewan Harian Nasional Angkatan 45 1976; 155, 212]。
- 29) 今後の課題に追加することとしては、インドネシアの辞書、百科事典、文学などで、「ロームシャ」などの日本語起源の語彙がいかに記述されているかを研究することがある。またマレーシア、シンガポールなど、東南アジアの教科書の一部にも、「ロームシャ」「ケンペイタイ」(憲兵隊)などの日本語起源の語彙が出ている[越田 1991]。今後、これらの国々の教科書などに出てくる日本語起源の語彙を調査して、インドネシアの場合と比較することも必要であろう。

＜資料＞「ロームシャ」の出ている中学校・高校の歴史の教科書

(A = 中学校, B = 高校)

- A 1 = Departemen Pendidikan dan Kebudayaan. 1976 (1st), 1985 (7th). *Sejarah Nasional Indonesia Untuk SMP III*. Jakarta: Balai Pustaka.
- A 2 = Martono HS. 1978 (1st), 1987 (11th). *Bidang Studi Ilmu Pengetahuan Sosial — Sub Bidang Studi Sejarah 1B Untuk Kelas I SMP Semester Kedua*. Solo: Tiga Serangkai.
- A 3 = Martono HS. 1988 (1st), 1990 (4th). *Bidang Studi Ilmu Pengetahuan Sosial — Sub Bidang Studi Sejarah Jilid 3A Untuk Kelas 3 SMP Semester Kelima*. Solo: Tiga Serangkai.
- A 4 = Hassan Natawiredja, Moch. 1987. *Pegangan Sejarah (Bidang Studi IPS) 3 — Untuk SMP Kelas 3*. Bandung: Armico.
- A 5 = Nana Warnia; and Wiana Mulyana. 1988. *IPS — Sejarah Untuk SMP Kelas III Semester 5 dan 6*. Bandung: Ganeça Exact Bandung.
- A 6 = Tugiyono Ks. 1988. *IPS Sejarah SMP 3A Kelas III Semester Kelima*. Jakarta: CV. Baru.
- A 7 = Asmid Kamal Chaniago; and Lubis, Husin *et al.* 1987 (1st), 1992 (8th). *Pendidikan Sejarah Perjuangan Bangsa PSPB 1 Untuk Kelas 1 SMTP*. Jakarta: Yudhistira.
- A 8 = Iit Rasita; and Sukarso *et al.* 1987. *Aku Cinta Indonesia — Buku Penunjang Pendidikan Sejarah Perjuangan Bangsa 1 Untuk SMP Kelas 1*. Kotip Klaten: PT Intan.
- A 9 = Wiana Mulyana; and Ahmad D. Sarbini. 1988. *PSPB Untuk SMP Kelas I Semester 2*. Bandung: Ganeça Exact Bandung.
- B 1 = Departemen Pendidikan dan Kebudayaan. 1986 (1st), 1993 (8th). *Sejarah Nasional Indonesia Untuk SMA III*. Jakarta: Balai Pustaka.
- B 2 = Sutrisno Kutojo; and Soetyoso *et al.* 1975 (1st), 1986 (4th). *Sejarah Dunia Jilid 3 Untuk SMTA*. Jakarta: Widjaya Jakarta.
- B 3 = Tugiyono, Ks.; and Syafei Suparmo *et al.* 1987. *Sejarah Nasional Indonesia II SMA Program Inti Kelas II Semester 3 dan 4*. Jakarta: Mutiara Sumber Widya.
- B 4 = Tugiyono, Ks.; and Eny Sastraatmadja *et al.* 1987 (1st), 1987 (2nd). *Pendidikan Sejarah Perjuangan Bangsa SMTA 1 Kelas 1 Semester 1*. Jakarta: Duta Aksara.
- B 5 = Eddy Jusuf; and Negoro, St. *et al.* 1987 (1st), 1992 (4th). *PSPB Kelas 1 SMTA*. Jakarta: Yudhistira.

参 考 文 献

＜資料＞で取り上げた文献はここには載せない。

- Adams, Cindy. 1966. *Bung Karno — Penjambung Lidah Rakyat Indonesia*. Abdul Bar Salim. (Alih Bahasa). Djakarta: Gunung Agung.
- アルジョ. 1978. 『全訳世界の地理教科書シリーズ13 インドネシア』安中章夫 (訳). 帝国書院.
- Ateng Winarno. 1991. *Kamus Singkatan dan Akronim, Baru dan Lama*. Yogyakarta: Penerbit Kanisius.
- Badan Penelitian dan Pengembangan Pendidikan dan Kebudayaan, Pusat Pengembangan Kurikulum dan Sarana Pendidikan. 1986. *Kurikulum Sekolah Menengah Umum Tingkat Pertama (SMP) — Garis-Garis Besar Program Pengajaran (GBPP) — Bidang Studi: Ilmu Pengetahuan Sosial*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Balai Pustaka. 1980a. *Untuk Bangsa dan Tanah Air — Ilmu Pengetahuan Sosial Jilid III Untuk SMA Kelas II Jurusan IPS/Bahasa*. Jakarta: Balai Pustaka.
- . 1980b. *Untuk Bangsa dan Tanah Air — Ilmu Pengetahuan Sosial Jilid I SMP Kelas I*. Jakarta: Balai Pustaka.
- 別技篤彦. 1977. 「インドネシアの地理・歴史教科書の検討」『新地理』25(1): 1-15.
- . 1990. 『戦争の教え方 — 世界の教科書にみる』新潮社.
- . 1992. 『世界の教科書は日本をどう教えているか』白水社.
- 文京洙 (編). 1992. 『アジアの人びとを知る本⑤ アジアで生きる人びと』大月書店.
- Departemen Pendidikan dan Kebudayaan. 1985a. *Garis-Garis Besar Program Pengajaran Pendidikan Sejarah Perjuangan Bangsa Untuk Sekolah Menengah Umum Tingkat Pertama (SMTP)*.
- . 1985b. *Garis-Garis Besar Program Pengajaran Pendidikan Sejarah Perjuangan Bangsa Untuk Sekolah Menengah Umum Tingkat Atas (SMTA)*.

- _____. 1985c. *Pendidikan di Indonesia dari Jaman ke Jaman*. Jakarta: Balai Pustaka.
- _____. 1987a. *Sejarah Nasional Indonesia Untuk SMP III*. Jakarta: Balai Pustaka.
- _____. 1987b. *Sejarah Nasional Indonesia Untuk SMA III*. Jakarta: Balai Pustaka.
- Dewan Harian Nasional Angkatan 45. 1976. *Sarimu Kupetik Kini*. Jakarta: Firma Aries Lima.
- 後藤乾一. 1984. 「日本軍政期のインドネシアにおける『労務者問題』覚書」『社会科学討究』（早稲田大学社会科学研究所）29（3）：65-98.
- _____. 1989a. 『日本占領期インドネシア研究』龍溪書舎.
- _____. 1989b. 『近代日本とインドネシア——「交流」百年史——』（フマニタス選書11）北樹出版.
- インドネシア共和国教育文化省（編）；森弘之；鈴木恒之（編訳）. 1982. 『世界の教科書＝歴史 インドネシア』ほるぷ出版.
- Johnson, Karin ; and Gaylord, Wendy *et al.* 1993. *Indonesia — A Study of the Educational System of the Republic of Indonesia and a Guide to the Academic Placement of Students in Educational Institutions in the United States*. Washington, DC: AACRAO and NAFSA.
- Kansil, C.S.T.; and Julianto M.A. 1986. *Sejarah Perjuangan Pergerakan Kebangsaan Indonesia*. Jakarta: Penerbit Erlangga.
- 唐沢富太郎. 1961. 『教科書から見た世界の教育 III —— 教科書と国際理解』中央公論社.
- 木村宏一郎（編著）. 1989. 『資料 生徒と学ぶ日本のアジア侵略——十五年戦争から今日まで——』地歴社.
- _____. 1991. 『世界の国ぐにの歴史・13 インドネシア』岩崎書店.
- _____. 1992. 「東南アジアからみた歴史教育の課題——『アジアの中の日本』の授業実践から』『アジアのふびとを知る本⑤ アジアで生きるふびと』文京洙（編）, 167-192ページ所収. 大月書店.
- 越田 稜（編著）. 1991. 『アジアの教科書に書かれた日本の戦争・東南アジア編』（教科書に書かれなかった戦争 Part 8）梨の木舎.
- 倉沢愛子. 1990. 「日本軍占領下のジャワにおける教育政策」『現代史における戦争責任』藤原彰；荒井信一（編）, 187-224ページ所収. 青木書店.
- _____. 1992. 『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社.
- 黒柳晴夫. 1986. 「インドネシア：学校制度の発展と国民的統合教育の展開」『東南アジアの社会変動と教育』アジア・ユートス研究会（編著）, 119-154ページ所収. 第一法規.
- 百瀬侑子. 1990. 「南方占領地における日本語普及と日本語教育——日本占領下フィリピンとインドネシアの場合（1942～1945）——」（「第2部 インドネシア」）『成城文芸』130: 50-77.
- _____. 1991. 「インドネシアにおける皇民化教育の聞き取り調査」『成城学園教育研究所研究年報』14: 36-59.
- 森 弘之；鈴木恒之. 1982. 「（特別解説 [1]）インドネシアの歴史教育と教科書」『世界の教科書＝歴史 インドネシア』インドネシア共和国教育文化省（編）；森弘之；鈴木恒之（編訳）, 290-295ページ所収. ほるぷ出版.
- 村井吉敬. 1991. 「ロームシャ」『インドネシアの事典』石井米雄（監修）；土屋健治；加藤剛；深見純生（編）, 458ページ所収. 同朋舎出版.
- 永井滋郎；松井政明. 1984. 「インドネシア高等学校（SMA）の歴史教育に関する一考察——歴史カリキュラムと教科書を中心として——」『広島大学教育学部紀要』2（32）：79-86.
- NHK 取材班. 1984. 『どう映っているか日本の姿～世界の教科書から～』日本放送出版協会.
- 日本大辞典刊行会（編）. 1976. 『日本国語大辞典 第二十巻』小学館.
- Nishihara, Masashi. 1976. *The Japanese and Sukarno's Indonesia: Tokyo-Jakarta Relations, 1951-1966*. Honolulu: The University Press of Hawaii.
- 西村重夫. 1992. 「日本占領期インドネシアの地方教育」『国立教育研究所紀要』121: 291-301.
- Nugroho Notosusanto, ed. 1975. *Sejarah Nasional Indonesia VI — Jaman Jepang dan Jaman Republik Indonesia*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- _____. 1979. *The PETA Army during the Japanese Occupation of Indonesia*. Tokyo: Waseda University Press.
- 三省堂編修所. 1983. 『広辞林＜第六版＞』三省堂.
- Sartono Kartodirdjo; and Marwati Djoened Poesponegoro *et al.*, ed. 1975. *Sejarah Nasional Indonesia I ~ VI*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- 左藤正範. 1980a. 「インドネシアにおける日本軍政の言語政策（その1）」『太平洋学会誌』第6号：111-124.

- _____. 1980b. 「インドネシアにおける日本軍政の言語政策 (その2)」『太平洋学会誌』第7号: 152-166.
- _____. 1980c. 「インドネシアにおける日本軍政の言語政策 (その3)」『太平洋学会誌』第8号: 143-150.
- _____. 1981. 「インドネシア語の中の日本語語源の語彙 — 日本軍政のインパクトに関する予備的データとして —」『伊東定典教授・洪沢元則教授退官記念論集 — インドネシア研究論叢 —』15-30ページ所収. 東京外国語大学インドネシア語学科研究室.
- _____. 1983. 「インドネシアにおける日本軍政期の言語・教育政策 — 日本海軍支配地域の場合 —」『京都産業大学論集』12(4) (外国語と外国文学系列) 第10号: 240-309.
- _____. 1989. 「インドネシア語の語彙にみられる日本軍政の影響」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』10: 5-73.
- _____. 1990. 「インドネシア語と地方語の辞書に見られる日本語語源の語彙」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』11: 20-52.
- _____. 1991a. 「『インドネシア語-外国語 (地方語)』の辞書に見られる日本語語源の見出し語」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』12: 6-44.
- _____. 1991b. 「インドネシア語とマレーシア語の辞書に出ている日本語語源の見出し語について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』12: 192-235.
- _____. 1992. 「インドネシアの教科書に出ている日本語語源の語彙について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』13: 208-295.
- _____. 1993a. 「インドネシアの教科書に見られる日本語起源の語彙リスト」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』15(1): 113-152.
- _____. 1993b. 「インドネシアとマレーシアの辞書に見られる日本語起源の見出し語リスト」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』15(1): 153-196.
- _____. 1994. 「インドネシアの文学書に見られる日本語起源の語彙リスト」『ことばのアスペクト』(京都産業大学言語研究会) 第7号: 41-62.
- 世界の教科書を読む会 (編). 1971. 『軍国主義 — 東南アジアの教科書にみる日本』合同出版.
- Sihombing, O.D.P. 1962. *Pemuda Indonesia Menantang Fasisme Djepang*. Djakarta: Sinar Djaja.
- 新村 出. 1991. 『広辞苑 第四版』岩波書店.
- スカルノ. 1969. 『スカルノ自伝 — シンディ・アダムスに口述 —』黒田晴海 (訳). 角川書店.
- スロト. 1983. 『全訳 世界の歴史教科書シリーズ32 インドネシア — その人々の歴史』伊東定典 (訳). 帝国書院.
- 鈴木 亮. 1982. 「(特別解説 [2]) 教科書に書かれたインドネシアと日本」『世界の教科書=歴史 インドネシア』インドネシア共和国教育文化省 (編); 森弘之; 鈴木恒之 (編訳), 296-302ページ所収. ほるぷ出版.
- 鈴木静夫; 横山真佳 (編著). 1984. 『神聖国家日本とアジア — 占領下の反日の原像 —』勁草書房.
- 田中 彰. 1983. 『日本人と東南アジア<インドネシアで考える>』小学館.
- Tim Penyusun Kamus, Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa. 1991. *Kamus Besar Bahasa Indonesia* (Edisi Kedua). Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan; Balai Pustaka.
- 内海愛子; 田辺寿夫 (編著). 1990. 『アジアからみた「大東亜共栄圏」』(教科書に書かれなかった戦争 Part 2) 梨の木舎.
- 山本達郎 (監修). 1965. 「東南アジア諸国の教科書にみる太平洋戦争」『中央公論』1965年10月号: 84-92.